

農業こそ21世紀の環境ビジネスだ！

農業のもう1つの道である「有機農業」の可能性が見えてきた。

OMR(オーガニックマーケットリサーチ)プロジェクトの調査報告書からこれからの日本の農業と環境ビジネスを占う。

環境ビジネスということ

1999年末、21世紀まであとわずかの年、私は環境と農業に関するはじめての本を書きました。その題名は「農業こそ21世紀の環境ビジネスだ！」というものでした。来るべき新世紀を「環境の時代」と位置付け、循環型社会をどのようにイメーajしていか、その中で農業はどのように変化していくかという問題提起を意図したものでした。

そこで主張したことは、環境の時代は大量生産をよしとする価値観の中で、ゴミの減量や回収、再生(再資源化)というシステムをいかに作るか、環境負荷をいかに軽減するか

ということではなく、そもそも循環、回収と再生を前提にしたモノづくりの思想とシステムが根本的に変化する時代となるということでした。

さらに、「循環」を前提に販売システムは「所有権の販売」から「使用权の販売」という考え方になり、消費者は使用が終われば所有者である生産者やメーカーにお返しすること、を前提に使用権を購入する。生産者やメーカーはいずれ戻ってくることを前提に循環に適した設計をし、素材選定をし、生産することになる。つまりモノづくりの価値観はレンタルという考え方をもとに根本的に変化するということでした。

そして他の産業でもそうであるように、農業にも「環境を守る農業」

もあれば「環境を破壊する農業」もあります。そして環境負荷がきわめて高いといわれる化学肥料や農薬、施設栽培など石油に依存し、エネルギーの一方的な消費を前提にしていた農業は次第に活力を失いつつあります。一方で化学肥料や農薬に頼らず有機物の循環による土づくりを前提にした有機農業の可能性は今後どうなのか、環境産業として発展する条件とは何か、そんなことに言及した本でした。

出版から10年が経ち、環境ビジネス

C2C(クレイドル・トゥ・クレイドル)という考え方 ゆりかごからゆりかごへ

スの最前線がどうなっているか。最近参加したセミナーで「C2C」という考え方に基づいた企業活動が具体化してきていることを知りました。

それは「ゆりかごからゆりかごへ」という意味で、これまでのモノづくりは資源から製品を作り出して、最後は廃棄物となっていました。そこでの環境対策はいかに廃棄物を減らし、あるいは再利用するかという問題でした。それに対しC2Cの考え方は「ゴミ」という考え方を排除した新しいモノづくりの考え方ということです。「水の循環、太陽熱の循環、食物連鎖など、地球における生物の営みや自然現象には、ゴミという概念がありません。あるものは次のものの資源または食べ物になっていきます。この自然の循環に立ち返ったモノづくりの考え方が、ゴミを出さないC2Cの考え方」ということです。ある意味、「ゼロエミッション」の究極の目標ということになります。まさに私が本でいわんとしたことで、作る以前にいかにしてゴミを出さない製品にするか、素材は自然に分解されるもの、回収分解しやすい